

操られる中国の権力者

金融アナリスト
永山卓矢

— 共産党大会が示唆するもの —

【米国に挑戦状を叩きつけた演説】

中国で18～24日にかけて開催された共産党大会では、党規約に習近平思想が明記され、幹部人事でも新たに昇格した政治局常務委員の多くが習総書記の系列で占められた。ただ、それ以外に重要なのが、その初日に行われた習総書記の演説であった。

この演説で習近平総書記は「中華民族の偉大な復興という中国の夢」という表現を何度となく繰り返し、大帝国の独裁政権を牛耳る絶対的専制権力者としての威厳を如何なく発揮した。これから中国は世界覇権国である米国に取り込まれる事なく独自勢力圏を構築していく事で、米国に比肩し対抗し得る勢力に発展させていく事を、今回の演説で「宣言」したと言っても過言ではない。

具体的には、2035年までに情報化などの現代化を進め、50年までに「現代化した社会主義強国」を目指すとしている——すなわち、習近平総書記は現時点では「永遠に覇権を唱えず、拡張もしない」として米国と対立する事を避ける姿勢を示しているが、そうした目標を掲げる事自体、米国に「挑戦状」を叩きつけた事を意味している。

これはすなわち、習近平総書記がかつて、鄧小平が外交政策の基本として唱えた「韜光養晦（とうこうようかい）」路線を明確に否定し、それを抜本的に転換する事を宣言した事を意味する。

この政策は米国はじめ周辺国と不毛な対立や紛争を避けて経済発展に邁進していく事で、密かに国力をつけていく戦略を推進するように論じたものだ。しかし、習総書記は既に南シナ海で東南アジア諸国を軍事的に圧迫しながら着々と軍事基地を建設し、軍事費も飛躍的に増額していくなど、軍事面も含めた対外膨張政策を積極的に推進してきた。実際には既に鄧小平路線を否定して独自の大国化膨張路線を推し進めてきたのだが、それを今回の党大会で正式に宣言した訳だ。

ただし、言うまでもなくそうした中国の姿勢は、いずれ米国の世界覇権と衝突せざるを得なくなり、米中両大国を軸とする巨大な対立構造に発展していかざるを得ない。第二次世界大戦後、世界は米国を中心とする政治的な民主主義、経済的な資本主義国家群と、ソ連を軸とする社会主義国家群の二大陣営に分かれて対立を続け、89年11月のベルリンの壁崩壊や91年1月のソ連邦の解体まで続いた。これから中国が米国の軍事的、経済的、文化的な影響圏に取り込まれる事なく独自の勢力圏を構築していけば、必然的に「新冷戦」構造に発展していかざるを得ない。

世界の二大超大国が中心になって軍事的な対立構造が長期に渡り続けば、常に軍需産業が巨大な利益を得るとともに、世界経済がそれにより成長軌道に乗って行ける事になる。戦争を引き起こしたり、それ以上に大国同士で長期間、軍事的対立構造を続ける事は、公共事業や減税政策を遥かに上回る巨大なケインズ効果をもたらすからだ。

【冷戦構造を謀略的に引き起こす】

大事な事は、こうした冷戦構造が世界覇権国の支配階級によって謀略的に引き起こされているという事である。

そうした権力者層としては、冷戦構造を長期的に続けるには「お膝元」の米国だけでなく、相手国も自在にコントロール出来なければならない。かつて、ソ連では欧州ロスチャイルド財閥の支援を得てレーニンやトロツキーが人類史上、最初の社会主義国家を誕生させたが、後に米ロックフェラー財閥が主導権を奪ってスターリンを操り、強権的な恐怖政治を繰り広げさせる事で米ソ冷戦体制が構築されてきた。それ以降、米系財閥の総帥デビッド・ロックフェラーが実質的にクレムリンを管理してきた。

こうした図式で考えれば、現在の中国でも米権力者層が習近平総書記をしっかりとコントロールしている筈だ。

実際、習総書記を擁立して胡錦濤前総書記の後継の共産党総書記、国家主席の地位に押し上げた最大の功労者は、今回の共産党大会を機に表向き引退する事になった党幹部の一人だ。

この人物は吉林省朝鮮族出身（漢民族出身ではない）であるだけに、極東に根付いている特異な右翼の宗教集団と密接なつながりがあり、またそれを介してイスラエルとも関係が深い。

この勢力は日本の安倍首相の背後勢力やロシアのプーチン大統領と関係が深く、米国では娘婿のクシュナー上級顧問を介してトランプ大統領ともつながるものだ。

さらに言えば、江沢民元総書記にはゴールドマン・サックス元最高経営責任者（CEO）のボールソン元財務長官が深い関係を結び、実際に元総書記の子息や孫がこの米系投資銀行の社員になっていたものだ。

この関係は、後の胡錦濤前総書記にも受け継がれ、またこの米系投資銀行を通じて欧州系財閥も影響力を行使してきた。

ところが、現在の習近平総書記を取り込んで操っている欧米人は、米系財閥直系のブラックストーン・グループのシュワルツマンCEOだ。現政権になってから、それまでゴールドマン系が優勢だった中国で、米系財閥直系のシティ・グループやエクソン・モービルが大規模に進出したのは決して偶然ではない。習総書記とともに反腐敗運動を繰り広げて政敵を次々に排除してきた王岐山・中央規律検査委員会書記が、米系財閥の金融資本と密接につながっている事も付記する必要がある。

【中国を潰す事は可能か？】

ただし、いうまでもなく米権力者層が相手の超大国を操作・管理して冷戦構造を展開できるのは、相手国の最高権力者を取り込んでいるだけでなく、その経済の「急所」をしっかりと握っている事がその基盤になっている。例えば、かつて米権力者層がクレムリンをしっかりと管理出来たのは、ソ連経済の大部分が原油や天然ガスの輸出に依存している中で、そうしたエネルギー価格を圧倒的な原油輸出国であるサウジアラビアを押さえている米系財閥が自在にコントロール出来たからだ。

現在でも、米系財閥はその気になれば中国を潰す事が出来る。それは一つには、中国はエネルギー安全保障面で重大な欠陥がある事だ。米国はサウジを押さえているだけでなく、米国の軍事力が海軍や空軍を中心に圧倒的に世界最強を誇るだけに、その海上輸送路（シーレーン）を押さえている事が指摘出来る。

もう一つは金融面の問題だ。中国でバブル崩壊が進んだり金融危機が起こらないのは、国有銀行が完全に統制されており、資金繰りに支障を来せば政府が迅速にそれを供給出来るからだ。

ただし、それは人民元が国際通貨としての信用が失われていない事がその絶対条件であり、人民元を買い支えたり銀行や市場への流動性の供給から外貨準備の取り崩しが進み、それが払底されるとそうした問題が顕在化せざるを得ない。

中国では民間、国有を問わず多くの企業が薄外で莫大な対外債務を抱えている。中国では市場経済機能が浸透しておらず、「採算」や「収益」といった概念がなく、実際に多くの国有企業は高度成長時代から本当は慢性的に赤字体質だったようだ。それを海外でドル資金を調達し、「偽装輸出」により国内に持ち込んで人民元に換えて売り上げに回す事で黒字を装っていた節がある。

人民元相場が上がり続けている時は「自然と」返済負担が軽減されていたので全く問題にならなかったが、それが反落傾向に転じると借金で「首が回らなくなる」危機に陥ってしまった。

人民元相場に下げ圧力が強まると、人民銀行が必死に外貨準備を取り崩し元買い・ドル売り介入を続け買い支えていたのはこのためだ。他の多くの新興国と同様、資本流出を促進させるFRBの金融引き締め政策は中国の「息の根」を止めかねないのである。

永山卓矢の「マスコミが触れない国際金融経済情勢の真実」

詳しくはこちらへ → <http://17894176.blog.fc2.com/>

ザ・テクニカル

泰然と構える

選挙後の日経平均株は自民圧勝を受け続伸、史上最長の16連騰を記録して一時22,000円台を付けた。先週は再びギャップアップの週となった。マドを埋めず上昇し続けるのは勢いのある証拠だが、逆にマドを埋めるような調整が入れば、一旦、上昇は終了するシグナルとなる。

先週のコメント「現在の中期トレンドは20週MA(20,083)が有効。上回っている限り全ての押し目は買いになる。しかしそこまで維持できない短期投資家は20,788以下の引け値にストップを置いてロングを維持。これは直近のギャップアップゾーンでもあり、現在は上抜けた上昇ウェッジの上限ラインにもあたる……最低でも20,788を下に来るまではロングを維持したい。次は96年6月高値22,750が目標、実に1992年以来、25年ぶりの高値となろう」。

今週、20週MAは20,183で始まる。先週の週間ギャップは21,503～21,614。トレーリングストップとしてこのギャップを埋めるまでは買いは維持してこの上値目標値を狙いたい。

今週の押し押し 今週は様子見して見極める

先週26日、欧州ではECBが量的緩和策の延長と債券購入規模の縮小を発表。米国では次期FRB議長候補からイエレン現議長が外れたという報道が。これらのニュースが米ドル買いのユーロ売りを加速させた。当欄ではユーロ／ドルに関してこう述べていた「…相場は8月末からの三尊天井ネックラインを試しにかかっている。これを上回るようなら、1月3日の安値に起因するトレンドラインを用いてもう一本のチャンネルラインを9月高値に引き、ここを目先の上値目標としたい。逆にこのネックライン突破に失敗した場合は先週予測した(8月、10月安値を結ぶ)もう1つの三尊天井ネックラインを試しにかかるだろう。ここで維持できれば再度反騰。維持できなければしばらく下げ基調か」。先週、相場は三尊天井が完成。従って下げ基調がしばらく続くか。ただ過去2年、相場は10～11月の高値から6～7週下げていた。今年の高値は9月8日なので、今週あたりに節目をつけるような安値が出るかも知れない。

アストロカレンダー

永井 元

9月後半は何も起きなかった。トランプが11月に来るが、直前ここで国内総選挙。後々大変なことになるから、トランプから「安倍さん、先に選挙やって勝っておいてくれないか」ということか…。トランプが来たら、おおよそのゴタゴタ時期の通知があり、話が漏れて株価急落か？

11月4日の満月図には、為替が一時的な傾向とイメージされるだけだが、翌週の下弦の月では、円高傾向で為替が嫌な方向へ向くと暗示がある。次の新月図は株が突っ込むと出ている。

北朝鮮は急におとなしくなった。これこそ「嵐の前の静けさ」ということかもしれない。株が今なぜ上がるか、市場は正直なのだろうが、理解に苦しむ向きもあろう。相場は、上がるために下がり、下がるために上がる。止まったりはしない。

現在、沖縄に不審な動きがあるという話が聞こえてくる。

有事に備えたとしか思えない動きらしい。現地に住む住人で、本州へ移動したいとか考えているような話だ。

首都にはそれは伝わってこないが、現地は不安の中にあると予測できる。この静けさがこのまま続くとは到底思えない。

n北の国内にいないとわからないが、いったいどうなっているか、トランプの「そのうちわかる」という一言が気になる。

20週前後のサイクルは今週8週目。ハーフサイクルが入るとすればその天井は間もなく到来する。しかし下げを警戒しては上値は追えない。急落が到来すれば、また買えるようにしておきたい。今週下げが入るようであれば、サポートは先週のギャップゾーンとなる。維持されれば買い場。要は20週MAを下抜けて引けるまでは泰然と構えて買いに徹する。



一方日柄面では今週は1月3日の安値から43週目。もし32週目の8月安値から週足サイクルが始まっていたら下降期間は更に長くなる。目先のサポートポイントは1.1420～1.1450付近。今週ネックラインを上回りダマシとならない限り、今週から来週にかけてこのサポートに向かうと思われる。

逆に今週以降、相場が引け値ベースでネックラインを超え1.1850～1.1900を超えると、基調は強気に戻るだろう。



アストロカレンダー 11月 永井 元

天文現象		注目マーケット	天文現象		注目マーケット
1 水			16 木		
2 木	月赤道通過	為替・小豆・ゴム	17 金	水星・火星60度	
3 金			18 土	新月 火星・冥王星90度	全マーケット
4 土	満月 金星・天王星180度	全マーケット	19 日		
5 日			20 月		
6 月	月最遠		21 火		
7 火			22 水	月赤道最南 月最遠	穀物
8 水	月赤道最北	穀物	23 木		
9 木			24 金	水星東方最大離角	株式
10 金	火星・海王星150度	軽い地震?	25 土		
11 土	下弦		26 日		
12 日			27 月	上弦	
13 月	金星・木星会合	アンバーサルデー	28 火		
14 火			29 水	月赤道通過	為替・小豆・ゴム
15 水	月赤道通過	為替・小豆・ゴム	30 木		

今週の相場風林語録

二九の一六

相場はソロバンで割り切れないことを言う

今週の九星★波動

そろそろの日柄

南雲 紫蘭

予想通りで予想通りの結果になった。そして株は好感 — というわけで、市場参加者にとっては最高の結果となりました。

筆者は想定外の苦戦もあり得ると想定していましたが、それもなかった — ということです。冷静に見れば、あざといほどの安倍首相の意図が見え隠れしていた争点なき選挙だったわけですが、蓋を開けてみれば野党の共倒れとなりました。

この結果は深刻です。野党は本来政権をしっかりと批判すればそれなりに伸ばすことも出来たはずですが、希望の党、維新など新保守というべき政党と、リベラルとされる立憲民主、共産などに野党が分裂、結果として小選挙区で大敗北を喫しました。

しかし、少なくとも大都市圏での野党は合わせれば自民党より多いのはもちろん、立憲民主の小選挙区ではかなり自民党候補者に肉薄しているケースもありました。この新保守とリベラルという野党の在り方は、今回こそ安倍政権に大敗しましたが、

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (418)

中原 駿

45 階までのシースルー構造となっているエレベーターが、上がっていく。

見慣れたシンガポールの街が、みるみるミニチュアになっていく。6 時でもあまり暗くないシンガポールの街では、まだ街灯もまばらにしかついていない。

夕日が旧アジアの英国風建物を照らす。多くはクリーム色に壁が塗られていて、オレンジの瓦が乗っている。

そんなクリーム色の壁に朱い光が射して、すべてがオレンジになるような切ない光景だった。

東京と違うのは、やはり植民地的なゆったりしたシティといわれる旧市街と、今、上野が立っているラッフルズ・プレイスといわれる新市街との好対照だった。

第六感の 年末年始元の本阿弥か



テクニカルアナリスト 葛城 北斗

サブサイクルトップアウトの時間帯に入る

ドル円相場は 114 円台に入ってきたが、やや勢いが衰えてきたように見える。前回はこれまで述べてきた金のフラクタルを追跡するとのシナリオで邁進してきたが、7 月の高値に迫ったところで警戒心が生じつつある。ただ 114 円 80 を超えて引けて来れば、まだ追跡は可能であり、同じ上昇期間を取るなら、あと 8 営業日の上昇余地が残されている。しかしドル円の 7～11 週サブサイクルが後半に入ってきた。

サイクル面からは一旦天井を付け、調整に入りやすい局面に入っていると考えられる。金のフラクタルとの葛藤があるが、トレードに関しては先週のコメントを参考にする。

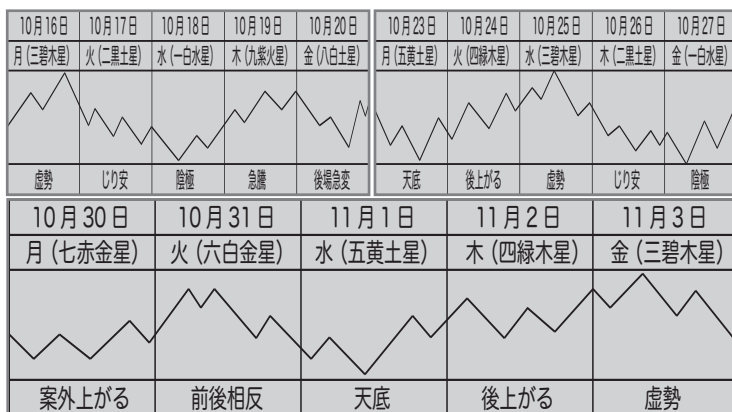
即ち「現在は判断に迷うところだが、結論として、以前紹介した金のフラクタルを参考に、上値を追うことにする。サブサイクルがまだボトムを付けていなければ、今週にも反転下落する恐れがあるので、ストップを浅めにとっておきたい。112.10 以下の引け値に設定したい。10 月 6 日高値を更新して続伸する場合、ストップを引き上げていけば良い（トレーリングストップ）。それは例えば 28 日移動平均（MA）を引け値で下回った場合とする」。ストップは入らず、今週も 28 日 MA（現在 112.69）にストップを設定して上値を追う。

下回ればサブサイクルボトムに向けた下げの過程に入っていると考えられるが、111 円台があれば買い直しを狙いたい。

この路線で政治理念を磨いていけば、次の総選挙は与党にとってそう簡単ではないでしょう。支持率低下の中で起こった与党の大勝は案外脆いものになる可能性がある点は要注意です。

さて、月盤《九紫火星》らしい強い相場が続いています。

そろそろ、オーバーシュートに気を付けたい日柄です。



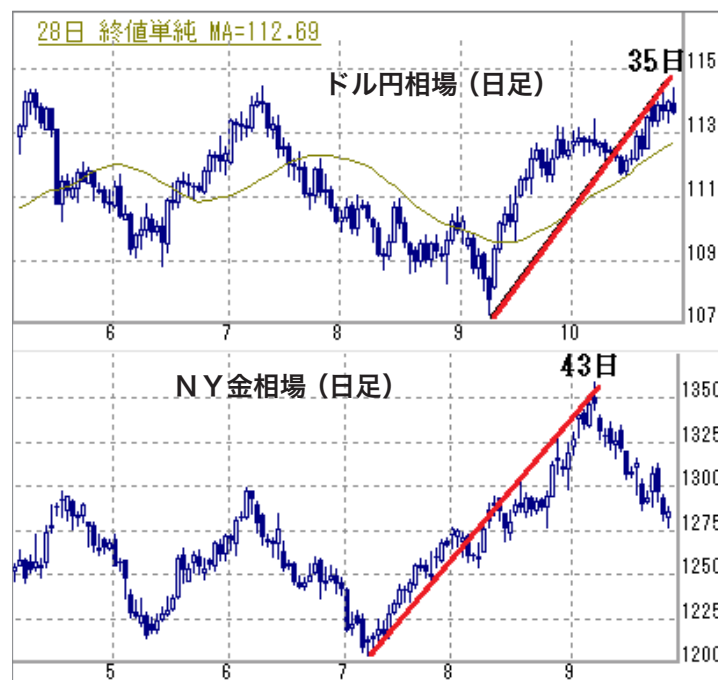
無機質ともいえるガラス中心の高層ビルが立ち並ぶ新市街は、ある意味上野仕事のようにどこかよそよそしく、量が巨大で、なおかつ圧倒的だ一、そして旧市街は落ち着いていて、古臭く、どこか懐かしい。

それでも、シンガポールも、上野自身もう旧市街には戻れない。新しく、嘘くさく、巨大なシステムに入り混んでいくしかないのだ一、

いや、もしかすると巨大なシステムに取り込まれてしまっているのかも知れない。そうした意味では、上野もグッドバイというブローカーも、これから面会できるはずの政府系金融機関のメンバーですらも、そうしたシステムの一員に違いないのだ。

いや、システムに取り込まれてしまっている哀れなメンバーなのかも知れない。

1 年サイクルが 9 月 8 日に付けているとすれば、上昇はまだ継続され、来年 3 月までは少なくとも天井は付けないだろう。ここで昨年同様、年末年始元の本阿弥パターンが出現する可能性が出てきた。2 年続けてはあまり考えられないが、12 月中に 118 円前後で高値を付けることも考えられる。次のサブサイクルのボトムは今年最後の買い場になり、12 月には年初来高値更新を狙いたい。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第63回】NY金のサイクルについて (9)

今回はNY金の34カ月、11カ月サイクルの解説。今回は週足を用いてプライマリーサイクル(PC)の解説をします。使用する移動平均は、MMAゴールドレポートで使用する日柄を用いました。レンジは通常15～21週。11カ月サイクル内に3～4つ入るのですが、ここ最近のPCは日柄があまり美しくありません。何故なら前回までの記述で指摘した相場の歪みがPCにも反映され、延長、短縮する場面が見られるからです。

例えば第3(最終)7.4年サイクルの中の第1位相(34カ月サイクル)の、更に第1位相(11カ月サイクル)を見ると、3つのPCが確認出来たのですが、第1サイクルが26週で延長PC、第2サイクルが18週で通常のPC、第3サイクルが起点から10週と、通常の短縮PC(11～14週)よりも更に1週短い超短縮PCとなっていました。

次の(つまり現行の)11カ月サイクルも、最初のPCは起点から12週目でボトムをつける短縮PCとなり、次のPCは起点である3月10日の安値から18週目の7月10日にボトムをつけ、現在は3つ目のPCがボトム確認場面に入っています。

メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

今週は週初と週末の相場に注意

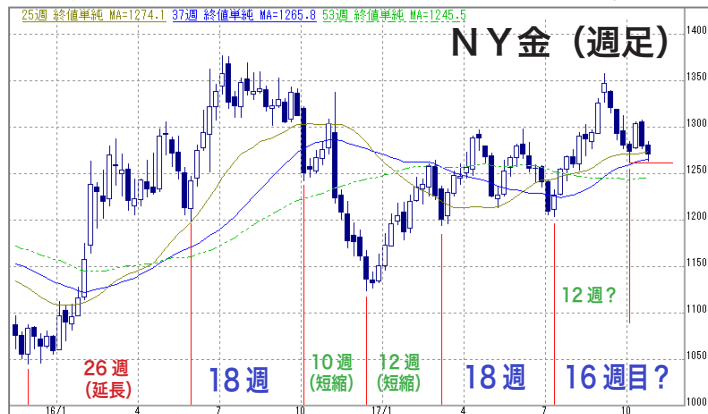
先週の当欄は「流れが変わる週？」と題し、文末をこう締めくくった“今週は先週末の新月・天王星オポジションによる“サプライズ”の影響を受け、市場や政治に関する見方が惑星サインチェンジによって変転すると予想。これにより株式は反転急落、金やユーロは反騰の流れに変わるのではないかと。ただし、日本時間今週末27日は太陽・木星コンジャンクション、翌28日は上弦と金星・冥王星スクエアが発生し、ヘリオ射手座ファクター中間点なので、ここも節目として注意したい”。

先週、欧州ではECBの金融政策の見通しに変化があった。米国ではFRB人事の見通しに変化があった。日本では衆院選での与党大勝で良くも悪くも流れが変わるのであろう。

また先週は火星と太陽がサインチェンジに、ヘリオ射手座ファクターの開始日が重なった。後者に関しては以前から「金やユーロにとって大きな上下変動の特異日」と指摘していたが、ECBコメント以降はユーロ相場が対ドルで大きく下落。今回のヘ

先週の当欄で指摘した10月6日の安値は7月安値から12週目。当初はここで短縮PCボトムをつけた可能性がありました。ただ先週の安値で、相場はこの6日安値と面合わせになります。

今週、6日安値が維持され反騰し、前週の高値を上回ると上記の見立てとなり、先週の安値はWボトムであったとなります。しかし割り込むようなら、このPCは通常の日柄でボトムをつける事になるでしょう。今週は起点から16週目なので、最大で12月8日までにPCボトムが出現する事になります。その場合、同時に11カ月サイクルボトムもつけるでしょう。



リオ射手座ファクターは下げに働く流れか。もし、このファクターが今週の相場の反転ポイントに影響を与えるなら、中間点付近にあたる週初10月30日の相場にまずは注目したい。

もし、10月30日付近が反転ポイントにならなかった場合、次の注目すべき時間帯はファクター終了日である11月3日付近となるだろう。ヘリオ射手座ファクター以外にも、この時間帯は気になる天体位相が重なっている。まず米国時間3日(日本時間4日)に太陽・海王星トライン(120度)が発生。海王星は原油の支配星であり、トラインは相場の上昇(ピーク)とそこからの反落と関連性が高い。次に4日に金星・天王星オポジション(180度)と満月(月・太陽オポジション)が発生。金星は金融商品全般に関連する惑星、天王星は“サプライズ”“ハブニング”の惑星。月齢も相場の転換ポイントになりやすい。

総じていえば、今週は週初と週末が反転ポイントになりやすいという事か。ただ、星回りの重要度を考えると、来週末11月11日に発生する土星・天王星トラインの方が高いのではないだろうか。長期相場サイクルの天井形成場面として、この時間帯を視野に置いておく必要があるかも知れない。

WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み！！

今週のアストロロジー info

- 10月30日(月) 小転換日
- 10月31日(火) 人が言う絶好の機会は錯覚に過ぎない
- 11月1日(水) 月初いきなり反転で始まる
- 11月2日(木) 雇用統計前、明日は日本文化の日
- 11月3日(金) 雇用統計は逆張りで対処
- 11月4日(土) 元の木阿弥はよくあるパターン
- 11月5日(日) 元の木阿弥から倍返しもよくある

高く仕入れて安値で投げる投資家から
脱却してアクティブブシニアになろう！

四半世紀以上、投資の最前線で活躍してきた
「プロ中のプロ」が語る現在の株式市場とは

- ◎マイナス金利時代に株を持ち続けて成功する秘訣を解き明かす
- ◎10倍になる株など豊富な実例で銘柄発掘の心得を公開！
- ◎株式投資の実践編として〈有望銘柄掲載〉！



株で資産を蓄える

～バフェットに学ぶ失敗しない長期株式投資の法則～

S・アダチ&カンパニー
代表取締役社長

足立 真一 著

発行：開拓社 定価：1,296円(税込み)

《11月から『フォーキャスト2018』予約開始！》
<https://www.toushinippou.co.jp/>